

お酒を飲んだら運転は「しない」「させない」

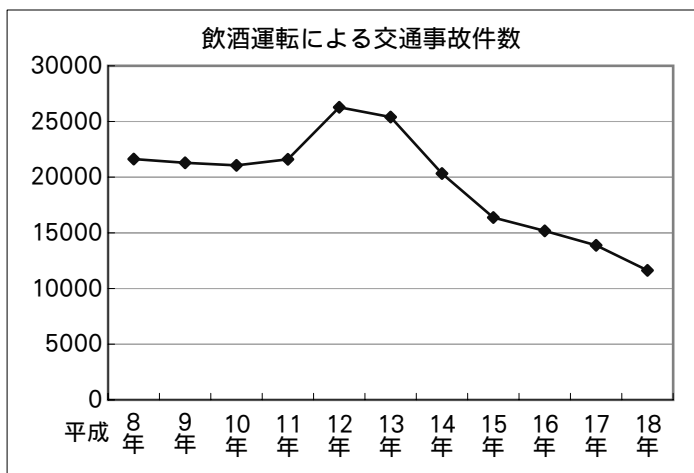
飲酒運転をなくす

平成18年9月の取り締まり強化や飲酒運転に対する非難の声が高まったことにより、飲酒運転による交通事故は10年前の約半分まで減少しています。

(平成18年12月末)

しかし依然、飲酒運転による交通事故は後を絶ちません。

これから年末を迎え、飲酒をする機会が増えます。「酔っていないから」、「ほんの少しの距離だから」という軽い気持ちの運転が、取り返しのつかない事態を招きます。



■ お酒を飲んで運転してはいけない理由



健康福祉課保健師
山根 奈生子

「お酒を飲むと運転にどんな影響を与えるのか、保健師に話を聞きました。」

「お酒を飲むと飲む前に比べて体にどんな影響を及ぼしますか」

酔いの程度は、脳内のアルコール濃度によって決まります。しかし、脳内のアルコール濃度を測ることはできないので、脳内のアルコール濃度とつりあつた関係にある血中アルコール濃度が酔いの指標となっています。表1（次のページ）は、血中アルコール濃度と酩酊度との関係を示したものです。警察の飲酒検問では、血中アルコール濃度とほぼつりあつている呼気中のアルコール濃度が利用されています。

ます。

お酒を飲むと、酔ったと自覚するよりも前から、安全な運転に必要な情報処理能力、注意力、判断力などが低下している状態になります。具体的には、気が大きくなり、速度超過などの危険な運転をする、車間距離の判断を誤る、危険を察知しブレーキペダルを踏むまでの時間が長くなるなど、飲酒運転は事故に結びつく可能性が高くなります。

現在、酔いを自覚しない位の低濃度から取り締まりの対象となっていますが、これは行き過ぎた設定ではありません。

「実際に、飲酒運転による事故での死亡事故率は、全体に比べると7.4倍と高い数値になります。（平成18年12月末）」

「アルコールは体の中でどうやって分解されますか。また、お酒に強い、弱いで血中アルコール濃度に差ができますか」

(表1) 血中アルコール濃度と酩酊度

血中アルコール濃度	区分	臨床症状	酒量 (目安)
0.02% ～ 0.04%	爽快期	気分さわやか。 活発な態度をとる	日本酒 1合、 ビール 大瓶～1本、 ウイスキー シングル～2杯
0.05% ～ 0.10%	ほろ酔い 初期	ほろ酔い気分。 脈拍数、呼吸数早くなる。 話はなめらかになり、抑制が外れる。	日本酒 1～1.5合、 ビール 大瓶1～2本、 ウイスキー シングル2～5杯
0.11% ～ 0.15%	ほろ酔い 極期	気が大きくなり、自己抑制が外れる。 立てば少しふらつく。	日本酒 2～3合、 ビール 大瓶2～3本、 ウイスキー シングル6～8杯
0.16% ～ 0.30%	酩酊極期	運動障害が出現する。 まともに歩けない。(千鳥足) 呼吸促拍、嘔気、嘔吐	日本酒 4～5合、 ビール 大瓶5～7本、 ウイスキー シングル8～10杯
0.31% ～ 0.40%	泥酔期	歩行困難。 転倒すると起き上がれない。 意識混濁、言語支離滅裂	日本酒 7～8合、 ビール 大瓶8～10本、 ウイスキー ボトル1本
0.41% ～ 0.50%	昏睡期	昏睡状態。尿尿失禁。 呼吸麻痺をきたし、死亡する危険大	日本酒 1升以上、 ビール 大瓶10本以上、 ウイスキー ボトル1本以上

(出典) 社団法人アルコール健康医学協会「適性飲酒の手引き」

アルコールは、大部分がアセトアルデヒドに変化し最終的に水と二酸化炭素に分解され、水は尿として、二酸化炭素は吐き息として排出されます。顔が赤くなったり、動悸、頭痛、吐き気といった症状を引き起こすのはアセトアルデヒドが原因です。一般的にお酒に強いといわれる人は、お酒の代謝が早い人のことです。お酒に強いからといって、アルコールによる影響を受けることが少ない訳では決してなく、むしろ、お酒に強いという人は「自分は酔っていない」と思うことが多いので、注意が必要です。アルコールの血中濃度が一定の濃度に達すればあらわれる症状は、お酒の強い弱いに関わらず一緒なのです。つまり、酒豪や下戸など、一般的に言われているお酒の強さには関係なく、身体に取り込まれたアルコールは、脳の理性や判断能力に一定の影響を及ぼします。

アルコールの分解には、どれくらいの間がかかりますか。お酒を飲んでもアルコールはすぐに作用をあらわしません。摂取したアルコールの血中濃度は、時間の経過と共に上昇し、状況によって異なりますが、一般的には摂取後1～2時間程度で最高血中濃度に達します。お酒を飲んだ時には症状がなくても、時間が経つと共に酔いの症状が進みます。成人男性の健康な肝臓が処理できるアルコール量は、夜飲んで朝までに分解するとすれば、日本酒3合程度が限界です。

「次の日に運転しないといけない時、前日の飲酒で気をつけなくてはならない事は、飲酒の翌日でも、息が酒臭いなど、外観上、通常以上の酒気を帯びていることが認められれば「飲酒運転」です。前日の飲酒が翌日に影響し、それが原因となつている事故もあるようです。深酒した翌日の運転はできるだけ控えましょう。

飲酒運転が厳罰化

平成19年6月、9月と続いた法改正により、悪質・危険運転者に対する罰則が強化されています。飲酒運転で死亡事故を起こした場合、5年間運転免許を取ることができなくなるだけでなく、危険運転致死傷罪で逮捕され、最高20年の懲役に処される可能性があり、また、危険運転致死傷罪などにならなくても、民事訴訟によって飲酒運転は本人の過失割合が大きく、多額の賠償金の支払いを命じられる事例もあります。また、以前は危険運転致死傷罪の適用を恐れて、事故現場から逃げる運転者がいたために、9月からひき逃げの罰則が引き上げられました。

飲酒運転はドライバーだけの問題ではありません

飲酒運転の罰則は、お酒を飲んだ運転者だけではなく、車を運転するのを知っていてお酒をすすめた人や、車を提供した人、

また、知っていて同乗した人も、同様に処罰の対象となります。

今年10月には、飲酒運転による死亡事故の訴訟で、同乗者にも運転者と連帯で1億600万円の賠償支払いを命じる判決が下されました。飲酒運転は運転者だけでなく、周りの人間にも大きな影響を及ぼします。

ハンドルキーパー運動にご参加ください

全日本交通安全協会では、飲酒運転追放のため、ハンドルキーパー運動を勧めています。ハンドルキーパー運動とは、自動車で飲食店などに行く場合、あらかじめお酒を飲まない人（ハンドルキーパー）を決め、その人が仲間を自宅まで送りとどけ、飲酒運転事故を防止する運動です。南部町のような公共交通機関の少ない地域では、やむを得ず自動車で飲食店に行く場合が多くあります。飲酒運転を追放するために、ハンドルキーパー運動に参加してみたいかがでしょうか。

インタビュー



ハンドルを握る時には絶対に飲まないという本人の自覚が大切です

交通安全協会南部町支部長

佐伯 克郎さん

交通安全協会では、毎年、年末に飲食店を回って、お酒を飲んで車の運転をしないように呼びかけるポスターの掲示をお願いしています。

飲酒運転は厳罰化となりましたが、ドライバーの意識や、環境が大きく変わったという感じはあまりありません。飲酒運転は本人が自覚して止めるしか方

交通安全協会は、地域の交通安全を目的に、学校や地域での交通安全指導や街頭PRなどの活動を行っています。

法はないのです。

飲酒運転をされる人は、「ちよつとしか飲んでいないから」「すぐそこまでだから」と車に乗ってしまう人が大半です。飲酒運転による事故の多くは、酔いの自覚のない酒気帯び運転や、基準値未満の飲酒運転です。

ハンドルを握る時は、絶対に飲まないと自分が自覚することが一番大切です。お酒を飲んだ時は、代行を利用するか、家族に迎えに来てもらうようにしましょう。お店の人も、お客がお酒を飲んで運転しないよう気をつけてください。「少しだから」だとか、「自分は大丈夫」ということはありません。

また、万が一事故を起こしてしまった場合は、逃げることなく被害者を保護してください。逃げることで、助かる命が助からない場合があります。